

東京は衝撃の街であった。過激派の学生が新宿駅の鉄壁や看板を倒し、線路、ホーム、駅舎に乱入した。それを排除しようとする警察隊や電車、列車、信号機に投石して警察車を横倒しにして放火。さらに南口階段付近に放火、列車ダイヤをまひさせた。わたしは大学には行ったり行かなかつたり、バイト、バイトに明け暮れたりしていた。すでに映画は斜陽であり、岡本喜八監督からは「映画監督は諦めろ」と

引導を渡されていた。ふてくされていた。新宿で、よくわかりもしないジャズをジャズ喫茶で聴いて、夜を明かしたものである。もう、演劇は始めていた。渋谷区初台にある劇団三千人会の研究生になっていた。牧歌的な演劇をやる劇団であった。激動

それから17年が過ぎて「ラガーとカヒッピーと呼ばれる若者たち」を著くことになる。このテーマを書くにはそれだけの歳月がいったのである。ラガーのテーマは「恨みに時効なし」「若気の至りは一生付きまとう」といったものである。あの学生のデモ隊だっ

とかヒッピーと呼ばれる若者たちが東京の盛り場にたむろし始めていた。新宿駅東口周辺にはとくに多かつた。ひげぼうぼうで汚れた奇抜な格好は「新宿じき」そのものであった。アメリカのヒッピーはプロステタント的な社会通念や支配体制に対

新宿騒乱衝撃の街

といわれた時代である。時代は激しい演劇を求めていた。乱立する小劇場から新劇団が攻撃された時代である。「造反有理」という言葉もあった。催涙ガス

た連中は、いまどんな生活をしているのだろうか。もし、平穩な生活をしているのなら、そこに過去を知る人が訪ねていけばどうなるのだろうか。テレビドラマにはありそうなテーマである。

する批判から、社会に背を向けた若者たちと理解されたが、日本のフーテンは、見てくれはアメリカの反体制的ヒッピーにそっくりではあった。が、「昭和元祿」に甘えただけとの批判もあった。ビニール袋でシンナー

から逃避しているだけの感じだ、わたしも「甘ったれるな」と苦々しく眺めていた。むしろ、衝撃的だったのは3億円強奪事件である。12月10日、9時22分ごろ、府中刑務所横の道路上で、東芝府中工場従業員ポナス3億円の現金が現金輸送車もろとも奪われるという事件である。血を流さずに、3億円の現金を奪ったあざやかな手口が評判になった。銀幕では、日活から渡哲也がデビューしていた。新宿日活の看板のプロフィルには趣味は「喧嘩」、特技は「空手」と書いてあった。同世代の、「敵わねえなあ」と感じた男たちの登場であった。(松浦市出身)